

野崎アサエ先生の御逝去を悼む

国文科主任代行 三 上 順

春まだ浅い三月、野崎アサエ先生は忽焉として逝かれた。

去る一月十日、先生は心筋硬塞の発作が起こり緊急入院された。二時間に及ぶ処置を終えた主治医は、初めの一週間が山と危惧していた。しかし、その時も無事越えることができて、その後の経過は極めて順調だった。二月の末には退院、そのあと一か月ほど自宅療養。四月からは従来どおり勤務できるだろうという主治医の説明に、私たちは愁眉を開いた。先生は予定どおり三月一日に退院、そして、十五日の卒業式と、そのあとに開かれる謝恩会に出席を申し込まれるほど、お元氣になっておられた。しかし、当日先生はお見えにならなかった。少し体調が悪く、大事をとって十三日に再度入院されたとのことだった。卒業式の翌日、三月十六日の午後、野崎先生逝去の報を受けた。受話器を持つ手が水りつくような思いで、しばし言葉は出なかった。

野崎先生は、広島大学に籍を置かれながら、昭和四十一年四月、本学開学の年から非常勤講師としてお勤めになられた。広島大学を定年ご退官後、ただちに、昭和四十八年四月本学専任教授として就任された。以来、入試問題作成委員長・入試委員などの要職をはじめ、学級担任などを務められた。昭和五十三年一月、岡政秋介先生逝去の後、国文科主任・国文学会会長などの要職を継承された。本学の発展に伴い、組織は次第に多様化し、近年は二十に近い委員会が設置されているが、野崎先生は、運営委員・女性文化センター運営委員などの要職をはじめ、数多くの役職を兼務された。責任感の強い先生にとって、気の休まる暇もない、ご多忙な日々連続だったと思われる。しかし、先生は悠揚迫らず、常にゆったりと構えておられた。まさに春風胎蕩、あの温和な笑顔や、独特の優しい口調、また、時に見せられる無邪気な子どもっぽい仕草、それによってまわりの雰囲気は常に和やかであった。しかも、何か事あれば毅然とした態度で臨まれ、安易な妥協はなさない、まことに頼もしい存在であった。

日とともに、野崎先生を喪った悲しみは深まり、追慕の情は募っていくばかりである。四月に入って『たまゆら』第二十三号を野崎アサエ先生追悼特集として刊行することが決まった。追悼号を出すにあたり、豊嶋学長・清水前学長をはじめ、多くの同僚・旧同僚・卒業生・在学生から、追慕哀惜の真情あふれる追悼文が寄せられた。今それらを収めた小冊子を先生の御靈前に捧げる運びとなった。

野崎アサエ先生の御遺徳を敬仰し、温容を偲びつつ、謹んでご冥福をお祈り申しあげる。